【General Background in Japanese Market】

・電子書籍の閲覧環境とWebPageの閲覧環境での、記号類の振る舞いの相違

今でも記号類の一部に、縦書きと横書きを変更した際に、環境によって振る舞いが異なるものが、多々ある。

原因は、電子書籍閲覧システムやWeb browserのバグも含め、多岐にわたるが、その中に、日本の（特に電子書籍で）フォント制作の事実上の標準(de facto standard)として用いられているAJ1-7の属性設定と、UAX50の規定の相違も含まれる。

環境による記号類の振る舞いの相違による混乱を避けるために、電子書籍コンテンツの制作現場では、特定の記号類については、やむを得ず、（符号化文字ではなく）図形として埋め込むことがしばしば行われている。

コンテンツ制作現場に長く携わり、電書魂というWebSiteを通した情報法発信も行っている田嶋淳は言う：

［やってられないよ、全く。クライアントは、見てくれさえよければ、中身なんかどうでもよくって、データの汎用性とか可搬性なんかな〜んも考え内だものね。］みたいなこと。

このこと（見てくれにこだわって、コンテンツの可搬性を既存すること）の弊害は、大きく分けて二つある。

・電子書籍の閲覧環境とWebPageの閲覧環境の分断、特に、電子書籍の縦書きとWebページの横書き、フォントサイズの変更

・視覚障害者を中心とするアクセシビリティへの障壁（Text to Speech）のトラブル

JLreq TFのメンバーで、JDCの技術面でのリーダーでもある村田真は、（状況に対する）怒りを込めて言う：

［全く頭にくるよ。出版社のヤツらは、障害者のことなど全然念頭にないんだから。どうでもいいような見てくれの細部にばかりこだわって、障害者の情報アクセスの機会を奪っている、なんてことは、これっしきも考えていない。無知蒙昧もいいところだ］みたいなこと。

このような状況と、田嶋さんや村田真からのインプットを受けて、JLreq TFでは、より詳細な技術環境の調査と、技術的改善方法の検討を進めている。

さまざまな環境があり、状況が錯綜しているため、技術的改善方法も簡単手はないが、今回提案した、UAX50とAJ1-7との仕様統一は、明確な前進(improvement)であることは疑い得ない。

【Possible negative impact for Japanese Market】

われわれの提案に対して、すでに市場に投入されている製品や環境へのnegative impactの予想ができないので、提案を受け入れるには、慎重であるべきだ、との一部の意見があったことを、やはりJLreq TFのメンバーであるAdobeのNatから聴いた。このことについて、JLreq TFとして、日本のいくつかのベンダーに、UAX50の変更によるJapanese Marketにおけるimpact（positiveもnegativeも含めて）を、直接インタビューした。

［フォントベンダー］

現在、電子書籍に用いられるフォントの大部分は、AJ1-7仕様に統一されており、変更することは実際問題として不可能である。

一方、UAX50がJA1-7と同等な仕様になれば、製品にUAX-7準拠を明示することが可能となり、事実上の国際標準であるUnicodeへの準拠性を積極的にアピールすることが可能にあり、（Backgroundで触れた）一般的な混乱状況に対するuserからのcomplaintに対するexcuseが容易となる。

みたいな。

［田嶋さん］

もう、大歓迎。でも、問題は他にも山積みでね。ま、気長に一つ一つ解決していくしかないね。AJ1-7とUAX50の統一は、技術的には小さな一歩かもしれないが、日本のフォント業界とUTCが協力して解決に向かっているという状況を世に知らしめる、という意味では、すごく大きな一歩になるね。

みたいな。

［大日本、凸版］

大歓迎。特に、日本の印刷業界は、出版業界だけではなく、広くICT環境やコンテンツにも係わっており、両者を繋ぐ部分におおきなビジネスチャンスがあると考えている。その意味で、電子書籍環境で主流のAJ1-7とICTで主流のUnicodeが統一されることの意味は、ことのほか大きい。

［Microsoft、Adobe、ジャストシステム］

山本太郎は、Microsoftの帽子をかぶったふりをするPeter Constableに対して、怒りを込めて言う：

［どうぞご自由に］

一方、CITPCの事務局長でもあり、Microsoft Japanの技術部門の事実上の責任者でもある田丸健三郎は、やや自嘲気味に言う：

［というか、現状でもWindows製品のフォント仕様は（歴史的な経緯や、対応する業務の多様性によって）いろいろであり、そもそも、AJ1-7ともUAX50とも異なるところが多々あって、（今回提案された）UAX50の3符号の振る舞いが変更されても、全く何の影響もありません。この件については、Microsoft Japanは完全にneutralポジションです］

みたいな。

［下川さん］

CIPTCの広報担当であり、日本の電子出版協会の副会長でもある下川さんは、言う：

［わりと一般的な大歓迎コメント］

【結論】

今回提案したUAX50とAJ1-7の統一は、日本のフォント業界にとっては、アナウンス効果が非常に大きい。また、現在は、分断されがちな、電子書籍閲覧環境とWebドキュメント閲覧環境の垣根を取り払う行動の第一歩としての意味も非常に大きい。さらに、今後、社会的関心がより大きくなることによって問われることが多くなると予想されるアクセシビリティに対する業界全体としての社会的責任を果たす、という意味も非常に大きい。

ま、そんなわけなので、ヨロシク。

UAX 50 was designed as a cornerstone of vertical writing for the Web and EPUB. CITPC is grateful to the Unicode Consortium for the timely development of UAX 50 and its ongoing maintenance.

However, there are some inconsistencies between UAX 50 and the Adobe Japan1 character collection (as defined in a GitHub repository, available at https://github.com/adobe-type-tools/Adobe-Japan1). Since many important fonts in Japan are based on the Adobe Japan1 character collection, the impact of these inconsistencies should not be underestimated.

Although the technical content of UAX 50 has been fairly stable since 2015, neither the Adobe Japan1 character collection nor existing AJ1 fonts have been modified according to UAX 50. Moreover, to the best of our knowledge, no font vendors in CITPC plan such modification. We believe that there are two reasons. First, such modifications without changing font names will cause serious interoperability problems to existing documents and applications. Second, new fonts with different names will cause migration troubles such as installation burden and mismatch of new applications and old fonts.

CITPC requests that the Unicode Consortium revisit the categorization of three characters in UAX 50. Although the current categorization is sensible, its practical benefits are less significant than the adoption cost, as we see it. If these changes are accepted, existing Japanese AJ1 fonts will become compliant with UAX 50.